

STAGE+を楽しむ(19)(HP 収載)
—カラヤンのモーツァルトレクイエム—

1. 始めに

前報(18)に引き続き、STAGE+の試聴を実施します。

2. 試聴音源

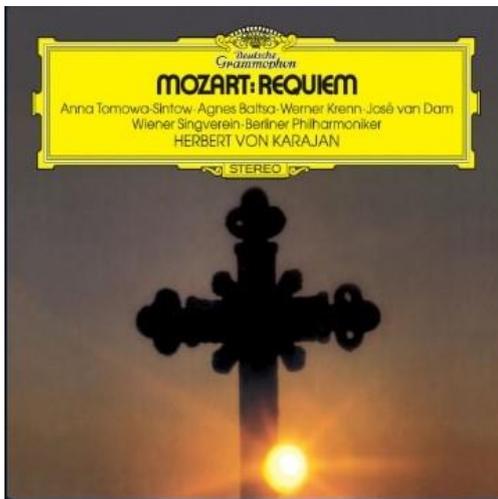
今回は、カラヤン指揮ベルリンフィルによるモーツァルトのレクイエムの演奏を選びました。

作品の概要と演奏者は次のとおりです。

Mozart: Requiem

**Anna Tomowa-Sintow, Agnes Baltsa, Werner Krenn, Jos van Dam,
Berliner Philharmoniker, Herbert von Karajan**

Wolfgang Amadeus Mozart Requiem In D Minor, K.626



なお、レクイエムについては、[アナログプレイヤーの比較試聴\(36\)](#)で手持ちの盤の下記について報告しています。

ドイツグラモフォン MG 2299

カール・ベーム指揮ウーンフィル

Wilma Lipp(Soprano) Hilde Roessl-Majdan(Alt)

Anton Demota(Tenor) Walter Berry(Bass)

Wiener SingFerein

ドイツグラモフォン 138767

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル
harmonia mundi HMM332292

レネ・ヤコブ指揮フライブルグバロックオーケストラ

また、モーツァルト盤を聴く(88)とモーツァルト盤を聴く(89)では下記の盤について、それぞれ報告を予定しています。

CBS SONY 20AC 1937

ブルーノ・ワルター指揮ニューヨークフィルハーモニック

Westminster WST 205

ヘルマン・シェルヘン指揮ウイーン国立歌劇場管弦楽団

今回、上記のカラヤン盤について再度聴き直して比較してみることにしました。

このアナログ盤と STAGE+の配信は、ソリストが異なるので、同一マスター由来のものではないようです。

3. 試聴の経過

STAGE+の配信では、一連の仮想アースや NRF-005T の導入により、元音源の収録は、かなり以前のものでありながら、フレッシュな印象で、ソリストや合唱の空間表現も確かなものになっています。

カラヤン盤の再生では、一聴して、カラヤンのアナログと分かるソフトな印象です。こうやって聴き比べると、配信も相当にグレードが上がってきたと感じさせるところがあります。

4. まとめ

STAGE+配信のカラヤン指揮ベルリンフィルのモーツァルトのレクイエムは、かなり以前の収録ですが、聴き応えのある演奏でした。

以上